

「物語る存在」として「よく生きる」とはどういうことか

提出日：2014年1月16日(木)

指導教員：足立英彦教員

名列番号：107

学籍番号：0951020167

氏名：吉田俊介

## 論文要旨

今日の道德論争は、解決の兆しの見えない果てしないものとなっている。そのような中で、価値相対主義的な主張が飛び交うようになり、その論争はますます混沌としたものとなっている。そして、自由主義的な考え方とは見解を異にし、20世紀後半に発展してきたコミュニタリアニズム(共同体主義)も、今やその論争の渦に巻き込まれ、道德論争のさらなる複雑化に一役買っているといえよう。

本論文は、そのコミュニタリアニズムの代表的論者といわれるアラスデア・マッキンタイアの著書『美德なき時代』を参考に、彼の物語的な考え方の紹介を行うことを目的とする。そのためにまず、問題提起を行った後、マッキンタイアの批判の対象となっている道德的個人主義について、その成立と問題について概説する(第1章)。次に、道德的個人主義の問題を克服するために最初にやるべきこととして、英雄社会、アテナイ、アリストテレスの諸徳の考え方についての見直しを行う(第2章)。最後に、マッキンタイアの物語的考え方を説明し、その考え方から導き出される「よく生きる」とどうということなのかを示す。そして、今後のマッキンタイアの課題を挙げる(第3章)。

## 目次

### はじめに

#### 第1章 道徳的個人主義の問題

##### 第1節 啓蒙時代の道徳の正当化とその失敗

##### 第2節 「道徳文化における忝意性」という問題

##### 第3節 「道徳文化における忝意性」という問題の克服

#### 第2章 諸徳の伝統

##### 第1節 英雄社会の道徳的特徴

###### (1) 英雄社会の道徳構造を理解するための3要素

###### (2) 英雄社会における自己の客観性の欠如

##### 第2節 アテナイの道徳的特徴

###### (1) アテナイにおける諸徳についての見解の不一致

###### (2) マッキンタイアの物語的な考え方の起源となる見解

##### 第3節 アリストテレスの徳論

###### (1) マッキンタイアの思想的始祖

###### (2) アリストテレスの徳論

###### (3) アリストテレスの徳論に対する3つの疑問

#### 第3章 「よく生きる」とはどういうことか

##### 第1節 物語的な考え方

###### (1) 不両立なリストから浮かび上がる徳の核心的概念の性格の背景となるものの存在

###### (2) 徳の核心的概念の性格の背景となる3段階の説明

##### 第2節 物語的な考え方から導き出される「よく生きる」ということ

##### 第3節 マッキンタイアの今後の課題

### おわりに

はじめに

現代に生きる私たちは深刻な悩みを抱えている。私たちは生き方がわからないのである。私たちは生きていくなかで判断を迫られることが無数に存在するため、よりよく生きるには、適切な判断をしなければならない。しかし、私たちはその適切な判断とはどのようなものなのかを知らない。そのような判断はどのようにして行われるのかという問題に、これまで多くの道徳哲学<sup>1</sup>者たちが取り組んできた。しかし、彼らの考えは意見の一致をみることはできず、今日も果てしない議論が続けられている。私たちは結局「よく生きる」こととはどういうことなのか、わからないまま今も生き続けているのである。

本論文は、そのような混沌とした道徳論争に終止符を打つべく、画期的な主張をしようというような大それたものではない。現在も続くこうした論争の中で、最も中心的な役割を担ってきた立場は道徳的個人主義である。この道徳的個人主義が陥っている「道徳文化における忝意性」という問題の克服をし、「よく生きる」とはどういうことかを「物語」という概念を用いて説明しようというのが本論文の目的である。そのためにまず、道徳的個人主義の陥っている問題について検討する。次に、道徳的個人主義への応答として物語的な考え方について説明する。最後に、私たちは「物語る存在」として「よく生きる」とはどういうことかを示す。論文の執筆にあたり、現在ノースカロライナ州デューク大学に勤務するアラスデア・マッキンタイア教授の理論を参考にした。

## 第1章 道徳的個人主義の問題

本章では、マッキンタイアが批判の対象としている道徳的個人主義を取り上げる。まず、啓蒙時代のディドロ<sup>2</sup>とヒューム<sup>3</sup>、カント<sup>4</sup>、そしてキルケゴール<sup>5</sup>の道徳の正当化という一連の試みとその失敗を簡単に整理する。そして、啓蒙時代の道徳の正当化という企ての失敗から誕生した道徳的個人主義に特徴的な「道徳文化における忝意性」という問題を挙げる。最後に、道徳的個人主義の問題への応答としてマッキンタイアの物語的な考え方の提示を行う。

### 第1節 啓蒙時代<sup>6</sup>の道徳の正当化とその失敗

---

<sup>1</sup> 先験的な立場から、道徳的事実の基底をなす普遍的原理、法則を明らかにしようとするもの。広義には倫理学と同じ意味で用いられる。

<sup>2</sup> フランスの哲学者、作家。

<sup>3</sup> イギリスの哲学者。イギリス経験論の完成者といわれる。代表的な著書は『人間本性論』など。

<sup>4</sup> ドイツの哲学者、思想家。ドイツ観念学の祖といわれる。代表的な著書として三大批判書『純粋理性批判』『実践理性批判』『判断力批判』。

<sup>5</sup> デンマークの哲学者、思想家。実存主義の創始者ともいわれることがある。代表的な著書は『あれかこれか』『おそれとおののき』など。

<sup>6</sup> 理性による思考の普遍性や不変性を主張する思想が主流となった17世紀後半から18世

マッキンタイアは道徳的個人主義の誕生が、ある時代の道徳哲学の分野に特徴的な試みがことごとく失敗したことに原因があると考えている。それは、啓蒙時代に多くの道徳哲学者が従事した、道徳の合理的な正当化という試みである。以下では、その試みの代表的な人物を列挙し、なぜ失敗したのかということについて考察する。

マッキンタイアが最初に挙げている失敗例は、キルケゴールの試みである。キルケゴールは、理性と情念の両方ともを排除する考察に有無を言わさぬ力があると受け取ったので、道徳を基準のない根本的な選択に基礎づけようとした。しかしその試みは失敗したのであるが、そもそもなぜ理性と情念の両方に道徳を基礎づけることはできないと考えたのか。それは、キルケゴールよりも以前のカントの試みに由来する。カントは道徳を理性に基礎づけようとしたが、失敗したからである。そして、カントの試みもまたデイドロとヒュームの失敗に由来するものである。なぜなら、デイドロとヒュームは道徳を情念や欲望に基礎づけようとした<sup>7</sup>が失敗した経緯があったからである。マッキンタイアは、キルケゴールの失敗が啓蒙時代における一連の組織的な試みの結果であると同時に墓標ともなったと考えている。こうして、道徳を合理的に正当化するという企ては決定的に失敗したのであり、これ以後、私たちに先行する文化の道徳、そしてのちには私たち自身の文化の道徳も、公共的で共有された合理的根拠あるいは正当化を一切欠くこととなったのである。

さらにマッキンタイアは、道徳の正当化という企ては最初から失敗することが確実だったと考えている。道徳の正当化という試みとは、道徳を人間本性に基礎づけようという試みのことである。つまり、道徳の性格とは人間本性のある諸特質を特徴づけるものとなり、道徳の諸規則はまさにそうした人間本性を所有している存在者であれば、受容することを期待できるような諸規則として説明され、正当化される。デイドロやヒューム、カント、キルケゴールの人間本性に関する諸前提から道徳の規則と教えがもつ権威についての結論を導くという論証を構築する企ては、この点において共通している。さて、これらの企てが失敗に終わらざるをえなかったのはなぜか。その理由は、古来の道徳的枠組と新しい道徳的枠組の基礎的な構造に違いがあるということにある。古来の道徳的枠組とは古典的<sup>8</sup>要素を含む、目的論的な枠組である。しかし啓蒙時代に理性の新しい概念が具体化され、デイドロやヒューム、カント、キルケゴールは人間本性に関する目的論的見解、つまり、人

---

紀にかけての時代。

<sup>7</sup> デイドロは「もし私たちが皆、長期的展望への啓蒙された目をもって自分の欲望を追いかけるなら、私たちに見えてくるのは、保守的な道徳規則はその大部分が、基礎を欲望と情念に置くよう訴えるならば立証されてくるような規則であることだ」と主張。ヒュームは「道徳は人間の生活に占める情念や欲望の位置に基づいて理解され、またその位置に言及することによって説明され正当化されるべきだ」と主張。

<sup>8</sup> 〈偶然そうであるところの人間本性(未教化の状態における人間本性)〉は、初めは倫理の教えと不一致・不調和。実践的な理性と経験からの教示によって〈自らのテロスを実現したならば可能となるところの人間本性〉へと形を変える必要がある。

人間性の真の目的を規定する本質を有する者として人間を見る見解をすべからく拒絶した。それにより一貫性を欠いた新しい道徳的枠組が形成されることとなったのである。

古来の道徳的枠組は 3 つの要素から成っており、その要素とは「未教化状態における人間本性」、「自らのテロス<sup>9</sup>を実現したならば可能となるところの人間本性」、「一方の状態から他方の状態への移行を可能にしてくれる道徳の教え」である。一方、新しい道徳的枠組は、「ある種の道徳内容、つまり目的論的文脈を奪い取られた一揃いの命令」と、「あるがままの未教化の人間本性のついてのある種の見解」、という 2 つの要素から形成されており、目的論的見解を拒絶した新しい道徳的枠組は目的のない枠組へと変化してしまったのである。したがって、啓蒙時代の道徳哲学者たちが取り組んだものは、古来の目的論的な道徳的枠組を否定したことによって、そもそも不成功が避けられなかった企てだったといえるのである。

## 第2節 「道徳文化における恣意性」という問題

啓蒙時代の道徳の正当化という企ての失敗によって近代の道徳理論はある問題を抱えることになる。近代の道徳理論において、道徳行為者は自分のことを道徳的権威の点で至高の存在であると理解する。また道徳の諸規則は、より古い目的論的性格と究極的には神の法の表現としてのよりいっそう古代の定言的性格が奪われてしまったため、何らかの新しい地位を与えられてきた。このような理論において道徳の正当化は、それに先立つ規則や原則の何らかの正当化を前提としているため、道徳論争がその諸前提の間で起こるものである限り、道徳の合理的な正当化をすることさえできない。啓蒙時代の失敗により、恣意的にある規則を作り上げ、古来の道徳的枠組を拒絶する、というような「道徳文化における恣意性」という問題が存在してきたのである。

## 第3節 「道徳文化における恣意性」という問題の克服

マッキンタイアは、「道徳文化の恣意性」という問題を克服するために、物語的な考え方を提唱する。物語的な考え方は、アリストテレスの道徳哲学が中心となっている古典的伝統における諸徳の考え方に基づき、形作られたものである。したがって、その伝統の出発点である詩人たちの描写する社会における諸徳から考察する必要がある。

## 第2章 諸徳の伝統

本章では、マッキンタイアの物語的な考え方を説明するために、その考え方の出発点ともいえる英雄社会の道徳的特徴の説明から行い、英雄社会に続く時代である古代ギリシアのアテナイの特徴を示す。さらに、その伝統をより決定的に構成したことにより、マッキ

---

<sup>9</sup> 目的、目標のこと

ンタイアが諸徳の伝統の代表者と見なすアリストテレスの徳論に言及する。

## 第1節 英雄社会の道徳的特徴

マッキンタイアの考え方の出発点となる英雄社会とは、紀元前 6 世紀のアテナイでその時期よりもはるかに古い時代を描いたホメロス<sup>10</sup>の叙事詩<sup>11</sup>や、13 世紀のアイスランドで紀元 930 年ごろの出来事を描いたサガ<sup>12</sup>、あるいは 12 世紀のアイスランドで 8 世紀の英雄たちの物語を描いた『クルーン半島の牡牛の略奪』<sup>13</sup>のようなアルスター朝の物語などに見られる社会のことである。英雄社会の物語は、古典社会についての今日の道徳論争に道徳的背景を提供したと考えられており、またそれらの物語が最終的に書き留められた時期の社会についての歴史的記憶を提供している。したがって英雄社会を理解することは、それに続いた社会とその社会の諸徳を理解するために必要である、ということに何ら疑問の余地はない。

さて、英雄社会は、その道徳構造について 2 つの中心的主張がなされるような社会形態を描写している。それぞれの主張の内容について確認し、それに続いた社会であるアテナイの道徳的特徴について検討する準備とする。

### (1) 英雄社会の道徳構造を理解するための 3 要素

以下に挙げる 3 要素のうちどれも、他に 2 つの要素への言及なしには完全に理解可能なものにはなりえず、個人の道徳生活と集団の社会構造において具体化されている、叙事詩やサガといった物語の形式の内部において相互に関係したそれぞれの位置を見出す。それらの関係を理解することによって、人間の生が 1 つの確定したある種の物語の形をもつということがわかる。

#### (ア) 英雄社会の特定の社会構造によって規定される役割をもつ個人

英雄社会における個人は、諸々の役割と地位が明確に規定され高度に決定された体系、すなわち血族及び世帯の構造の内部において、与えられた地位と役割をもっている。したがって、血族及び世帯の構造における自分の役割を知っているということは、自分が負っている義務、及びそれぞれ他の役割と地位を占めるものが自分に対して負っている義務、すなわち自分もっている特権を知っているということである。そしてそれは、義務や特権を果たすためにいかなる行為が要求されるのか、いかなる行為がそうした要求を満たさないことになるのかについて明確に理解していることと同じことである。

---

<sup>10</sup> 古代ギリシアの詩人。叙事詩『イーリアス』や『オデュッセイア』の作者とされる。

<sup>11</sup> 歴史的事件、英雄の事跡、神話などを題材に、民族または国民共同の意識を言い表した長大な韻文。

<sup>12</sup> 古ノルド語によって記された散文形式の物語の総称。語られた出来事、物語、を意味する。

<sup>13</sup> アイスランドのアルスター英雄詩群の中の代表的な作品。

### (イ) 個人にその役割を果たすための力を与える特質としての徳

ホメロスの叙事詩の中で描かれた人物について、ヘルマン・フレンケル<sup>14</sup>は以下のように述べている。

「人とその人の行う諸行為とは同一のものとなる。つまり人は、自分の諸行為の中に、完全にそして十分に、自らの存在を包み込ませているのである。彼には何ら隠された深さはない……。人々の言行についての事実報告の中で、人々が何者であるかは逐一表現されている。なぜなら彼らは、行い、語り、被ること以上の存在ではないからである」<sup>15</sup>

英雄社会において、人とはその行うことに他ならないため、人を判断するとはその人の行為を判断することである。行為とは特定の構造の中で明確に理解されているものである<sup>16</sup>ので、ある特定の状況においてある特定の種類の行為を果たすことによって、人は自らの徳と悪徳に関する判断のための根拠を与えることになる。したがって徳とは、自由に行う人としての役割をその人に留めておく諸特質<sup>17</sup>であり、またその人の役割が要請する諸行為において発揮されてくる諸特質であるということも認めることになる。

### (ウ) 運命と死から逃れることのできない人間

英雄社会の人間は、死が差別なく待ち受けており、不可避な諸範型、すなわち英雄社会に特有の社会構造とそこに見出される諸徳によって決定づけられた運命から逃れることができない。したがって、英雄社会においてなすべきことをなす人々が自己の運命と死に向かって着実に進んでいく存在であるということを示している。

## (2) 英雄社会における自己の客観性の欠如

英雄社会における自己は自分の文化と社会をあたかも外部からのように眺める方法はない。なぜなら特定の立脚点や観点から自分を引き離す能力、いわば一步さがって外部からその立脚点や観点を眺め判断する能力を欠いているからである。これは、近代の道德哲学者たちが人間の自己性の本質的特性であると解しているものを欠いていることを示している。

## 第2節 アテナイの道徳的特徴

前節では、英雄社会の道徳的特徴を述べた。本節では、英雄社会の特定の社会構造に位置づけられた諸徳についての考え方に変化が見られるようになった、古代ギリシアのアテ

<sup>14</sup> アメリカの代表的な女性劇作家。代表作は『子供の時間』や『子狐たち』、『ライオンの監視』などである。

<sup>15</sup> アラスデア・マッキンタイア著(篠崎榮訳)『美德なき時代』(2012年、みすず書房)149頁

<sup>16</sup> 第2章第1節(1)(ア)参照

<sup>17</sup> 行為するかしないか、どのように行為をするかなどを自由に決定できるということ



ナイでの道徳的特徴について説明する。そして、アテナイにおいて主張された諸徳についての考え方の中でも、特に注目すべきものであるソポクレスの見解を紹介する。

#### (1) アテナイにおける諸徳についての見解の不一致

アテナイにおいて最も重要な道徳的特徴とは、英雄社会には見られなかった諸徳についての不一致が存在するようになったという事実である。この事実は、ソポクレス<sup>18</sup>の悲劇『ピロクテテース』や『アンティゴネー』、あるいはアイスキュロス<sup>19</sup>の悲劇『オレスティア』などによって示されている。これらの悲劇は、主要な道徳共同体が血族及び世帯ではなく都市国家となったとき(特にアテナイの民主制国家となったとき)、諸徳の考えが違って来た、ということを示唆している。なぜなら、ある徳の概念が特定の社会的役割の概念から著しく遊離するようになったからである。つまり、英雄社会における人間には、血族及び世帯という共同体に具体化され、訴えが向けられる基準の外部には何も基準が存在しえないが、アテナイの社会の人間には、自分の共同体を疑問視し、あれこれの実践や政策が正しいかどうかを問うことのできる基準を手に入れることができたということである。したがって、ここに道徳上の不一致が生じることとなる。ここで注意しておきたいのは、この道徳上の不一致が、たんに一揃いの諸徳が他の一揃いの諸徳に対置させられているということだけではなく、同一の徳についての競合する考えが共存しているということがあったということである。アテナイの社会では、一揃いの徳 - 表示語<sup>20</sup>が受け入れられていたが、それらの各々が何を要求し、なぜ徳と見なされているのか、すなわち「徳とは何か」という問いに答える形で説明される、諸徳についての競合する考え方があった。たとえば、ソフィストたち、プラトン、アリストテレス、そして悲劇作家とりわけソポクレスの見解が挙げられる。

#### (2) マッキンタイアの物語的な考え方の起源となる見解

ここでは、ソポクレスが悲劇の中で示唆した諸徳についての考え方に注目する。なぜなら諸徳についてのソポクレス的見解は、マッキンタイアの物語的な考え方と密接な関係があるからである。以下では、ソポクレス的見解の特徴とそこから考えられることを示す。

諸徳についてのソポクレス的見解は 3 つの特徴をもっている。第一に、ソポクレスは、一方では諸徳の認知に含まれている客観的な普遍的秩序を承認することと、他方では人間がもつ客観的な普遍的秩序の察知力や実践的判断とのギャップを放置したままにしている

---

<sup>18</sup> 古代ギリシアの 3 大悲劇詩人の 1 人で、古典悲劇の完成者とされる。現存する作品は『アンティゴネー』『エレクトラ』『オイデュプス王』など 7 編である。

<sup>19</sup> 古代ギリシアの 3 大悲劇詩人の 1 人。神々の正義の貫徹と運命の力に抵抗する人間の英雄的姿を描いた。現存する作品は『ペルシア人』『縛られたプロメテウス』、三部作『オレスティア』などである。

<sup>20</sup> 諸徳のリストのことであり、不一致が存在したのはその内容についてである。

ということである。つまり、不両立な諸徳についての考え方の存在する状況では両方の考え方に権威があることを認めなければならないし、またそのような秩序の察知力や実践的判断はそれらの考え方を完全に調和させうるほどのものではないということである。第二に、ソポクレス的自己は社会がそうだとみなしているところの存在、すなわち社会秩序の中に自分の場をもち、さらに第一の特徴で認めた決定的な衝突を認めることでそれを超越する存在だということである。第三に、ソポクレス的自己の人生は、叙事詩の英雄がもっていたのと同じような自分に特有な物語の形をもっている。諸徳についての英雄社会での見解とソポクレスの見解との間の違いは、人間の生と行為の中心の特徴をもっともよく説明している物語の形式による違いによるものだといえる。

これらの特徴から考えられることとは、諸徳についてのある立場を採用することは、一般的にいて人間の生の物語的性格についてのある立場を採用することになるだろうということである。人間の生が、諸徳についての競合する不両立な主張が存在することで現れる決定的な衝突を経ての進歩していくものだと理解されるのであれば、諸徳の所有と行使が一般にこの進歩という営みの成功に資するような性質として位置づけられ、悪徳も同様にその失敗に資するような性質として位置づけられる。したがって、ある種の諸徳に対する信念とある種の物語的性格をもつ人間の生に対する信念とが内的に関係していることが理解できる。このことから、人間の生の物語的性格についてのこのソポクレスの見解こそが、マッキンタイアの物語的な考え方の起源となっていると考えられる。

### 第3節 アリストテレスの徳論

本節では、アリストテレスの徳論を取り扱う。アリストテレスはマッキンタイアの思想的始祖といわれることもあるが、なぜそのようにいわれるのかということから説明を始めたい。そして次に、アリストテレスの徳論のうちマッキンタイアの説明に重要なものを中心に紹介し、次章の準備としたい。まず、善と諸徳についての関係について考察する。次に、諸徳について性格的徳と知性的徳の区別をするが、マッキンタイアとアリストテレスはそれらの徳の区別について異なるアプローチをしているため、両者を関連づけて説明する。そして、両者の情念との関係にも言及する。また、諸徳の相互関係について、諸徳の一性と友愛というキーワードをもとに理解する。さらに、アリストテレスの実践的推論<sup>21</sup>の構造も重要な説明であるため紹介する。最後に、アリストテレスの徳論に対し生じる疑問を挙げ、次章のマッキンタイアの考え方につなげる。

#### (1)マッキンタイアの思想的始祖

まず、なぜ特にアリストテレスを取り上げる必要があるのかということ、本論文において

---

<sup>21</sup> 一般的には2つの前提命題と1つの結論命題から成り立つ実践的な三段論法。G.E.R.ロイド著(川田殖訳)『アリストテレス』(1973年、みすず書房)100頁参照

参考にしているマッキンタイアの理論はアリストテレスの徳論に負うところが大きいからである。さて、マッキンタイアは、アリストテレスがもちえなかったある観念を念頭において議論する。それは、「思考伝統」という観念である。その観念の中心にあるのは、過去はたんに捨てられるべき何かではなく、むしろ現在は過去に対する注釈と応答としてのみ理解可能であるということである。さらに言うと、その注釈と応答の中で過去は、もし必要で可能ならば是正され超越されるが、現在が次には将来のより適切な視点によって、それがなされるという余地を残す。このような観念においてアリストテレスは、たんに 1 人の理論家としてではなく、1 つの長い伝統の代表者として見なされる。なぜならアリストテレスは、先駆けともいえる詩人たちがたんに主張するか示唆するかしかできなかった多くのことを確立し、古典的伝統を道徳思考の伝統として決定的に構成したからである。マッキンタイアは、自分自身の諸徳についての説明も、アリストテレスをその最大の代表者とする伝統の一部と考えているため、アリストテレスはマッキンタイアの思想的始祖といわれるのである。

## (2)アリストテレスの徳論

### (ア) 善と諸徳の関係

アリストテレスは『ニコマコス倫理学』<sup>22</sup>の冒頭で次のように述べている。

「あらゆる技術、あらゆる研究、同様にあらゆる行為も、選択も、すべてみな何らかの善を目指していると思われる。」<sup>23</sup>

人間の活動や実践、あるいは探求はすべて何らかの善を目指している、すなわち何らかの目的に向かって行われている。私たち人間はある行為をしたり、選択をしたりするときは、何らかの目的、善を目指してそれらのことを行う。これは、人間の特有な本性であると考えられる。言い換えれば、人間に特有な本性とは人間がある種の目標と目的、特有のテロスに向かって運動するということである。

さて、では人間にとっての善とは何であるのか。アリストテレスはそれを「エウダイモニア<sup>24</sup>であること」とする。これは、「よくあること」あるいは「よく生きること」と同じことである。ただし、その内容については未決定のままにしている。したがって、人間にとっての善と諸徳との関係とは、諸徳とはそれを所有することで個人が人間にとっての善であるエウダイモニアを達成できるようになる特質であり、それを欠くことでそのテロス

---

<sup>22</sup> アリストテレスの代表的著書。「ニコマコス」とは、アリストテレスの父親の名前であり、また息子の名前でもあるため、父親に捧げられたものか、息子によって編纂されたものか、意見が分かれている。

<sup>23</sup> アリストテレス著(朴一功訳)『ニコマコス倫理学』(2011年、京都大学学術出版会)4頁

<sup>24</sup> 幸福(happiness)と訳されることが多いが、マッキンタイアは「止むを得ず」そのように訳すと述べている。アラスデア・マッキンタイア著(深谷昭三訳)『西洋倫理思想史』(1986年、以文社)86頁参照

に向かう運動が遮られてしまう特質である、ということになる。アリストテレスの見解は目的論的であるため、次のこともいえる。諸徳の行使は人間にとっての善の達成という目的への手段であり、また、たんなる手段というだけでなく人間にとっての善を目指す人生において必要で中心的な部分である。

#### (イ) 性格的徳と知性的徳の区別

アリストテレスは諸徳を性格的徳と知性的徳に区別する。この区別をマッキンタイアも支持している。しかし両者がそれらを区別するための方法は異なっている。しかし、その区別の内容については同じである。

マッキンタイアは性格的徳と知性的徳を行使のされ方に基づき区別する。まずマッキンタイアは中心的な徳をプロネーシス、すなわち思慮であるとする。これは一般的に、個々の場合にどう判断力を行使するか、つまりカタ・トン・オルトン・ロゴン(まっとうな分別に従って)判断することがどういうことかを心得ていることを意味し、このときに行使されるものが思慮、すなわち知性的徳である。また、性格的徳は知性的徳がなければ行使されない。アリストテレスは諸徳を一般的に特徴づけるために、過度と不足の中間という観念を用いるが、カタ・トン・オルトン・ロゴン判断することは過不足について判断することである。たとえば、気前のよさという徳は、浪費とけちという悪徳の間にある徳であるが、それが行使される状況によって発揮すべき程度は異なるので、思慮という徳によってカタ・トン・オルトン・ロゴン判断されることにより行使される。

一方で、アリストテレスは性格的徳と知性的徳の獲得のされ方に基づき区別する。性格的徳は、人間がそれを受け入れる資質をもっており、習慣を通じて獲得される。たとえば、ヴァイオリンを弾くことによってヴァイオリン奏者になるように、勇気ある行動をとることによって勇気ある人になる。つまり、まずその行為を現実化することによって身につけるのである。それに対して、知性的徳は教示によって獲得されるものであり経験と時間を要するものである。たとえば、自動車の運転ができたとしても、信号の意味を知らなければ信号の示すとおり自動車の操作をすることはできない。それを知るためには、自動車学校などで学ぶ必要がある。つまり、理論的あるいは実践的に賢明な判断ができるのは体系的な教授が必要だということである。

#### (ウ) 諸徳と情念との関係

次に、諸徳と情念との関係について述べる。マッキンタイアは、道德教育は1つの「感情教育」であると表現している。なぜなら、人は快樂のために低劣なことを行い苦痛のために立派なことを差し控えてしまう、という傾向にあるため、よろこぶべきことをよろこび苦しむべきものを苦しむように、若い頃からなんらかの仕方で指導されなければならない。諸徳は、快苦といった情念や欲望を陶冶し促進したり、あるいは逆に抑制したり減じたりすべきかを合理的に決定し、また特定の機会において自分にとって善であるもの以外の何かに対する欲望を抑制できる性向でもあるからである。

### (エ) 諸徳の一性

アリストテレスは、思慮という徳なしには本来の意味での善き人にはなりえないし、また性格的徳なしには思慮ある人にはなりえず、思慮という徳がそなわると同時に、他の徳もそなわることになると述べている。たとえば、正しい人は正義の徳に対応する悪徳の 1 つであるプレオネクシア、すなわちむさぼりという悪徳に陥ることはない。しかし、プレオネクシアを避けるためにはソープロシュネー、すなわち節制という徳を所有しなければならない。このような諸徳の相互関係を「諸徳の一性」というが、この性質と善についての同意は、人間にとっての善の実現を共有の目的とする共同体、すなわちポリス<sup>25</sup>を成り立たせる人々の絆、すなわち友愛<sup>26</sup>というそれ自身徳とされている絆を生み出す。

### (オ) 実践的推論の構造

アリストテレスの見解に基づく実践的推論は、人間の行為が理解可能であるための必要な諸条件を言明しているものとして、また人間的と認められるいかなる文化にも妥当するはずの仕方と言明を行っているものとして理解される。アリストテレスの実践的推論は 4 つの本質的な要素をもつ。1 つ目の要素は、推論が表現していないが前提している行為者の望みと目標である。これらがなく場合、推論を行う文脈も存在しないであろうし、それぞれの前提は行為者が行うべき事柄を適切に決定することができなくなる。2 つ目の要素は、大前提、すなわち「これこれを行ったり、所有したり、求めたりすることは、誰それにとって善い、あるいは必要とされているタイプの事柄である」という趣旨の主張である。3 つ目の要素は、小前提、すなわち知覚判断に基づいて行為者が「これが要求されている事例や場合である」との主張である。そして 4 つ目の要素は、結論となる行為である。したがって、この推論は諸徳の所有が行為によって判断されるということの意味している。

### (3) アリストテレスの徳論に対する 3 つの疑問

ここまで物語的な考え方にとっても重要であるアリストテレスの道徳構造について見てきたが、以下の 3 つの疑問を挙げておく必要がある。なぜなら、それらの疑問はその道徳構造を脅かしかねないため、適切に解決すべきであるものだからである。

#### (ア) アリストテレスは形而上学的生物学<sup>27</sup>を目的論の前提としている点への疑問

アリストテレスの徳論を支持する近代の道徳哲学者は、次のように論じる。

---

<sup>25</sup> 古代ギリシアの都市国家。

<sup>26</sup> アリストテレスが考える友愛とは、ある善を分かち合って認め、追求することに具体化されるものであり、私たちが普段用いる愛情とは異なる。この分かち合いは、世帯や都市など、あらゆる形態の共同体を成り立たせるために不可欠で第一のものであるとされるのである。アラスデア・マッキンタイア著『美德なき時代』191 頁参照

<sup>27</sup> アリストテレスの形而上学に基づいた生物学。アリストテレスは、あらゆる存在者を存在者たらしめている根拠を探求する形而上学を第一哲学と考えた。その具体的内容についてはここでは省略する。

「諸徳と悪徳についての論を正当化するために私たちが提供すべきことは、人間の幸福と善きあり方が何にあるのかについての、何らかのごく一般的な説明だけである。そうすると諸徳は、そうした幸福と善きあり方を促進するのに必要な性質として十分に特徴づけられることになる。なぜなら、……何が徳で何が悪徳かについては、私たちは合理的に意見を同じくできるはずだからである。」<sup>28</sup>

この見解は、人間の幸福と善きあり方が実際に何にあるのかをめぐる深刻な抗争が私たちの文化の歴史において占める位置と、それらに関する競合し不両立な信念が諸徳の競合し不両立なリストを産み出す経緯を無視している。目的論的説明が十分なものになるには、テロスについての何らかの説明を与える必要がある。したがって、アリストテレス的な説明が十分なものになるためには、アリストテレスの形而上学的生物学の説明が不可欠だが、その生物学を拒否するならば別の目的論的説明が補われる必要がある。

#### (イ) アリストテレス主義を適用する社会の不存在に関する疑問

アリストテレスの徳論は、古代の都市国家であるポリスの社会関係による脈絡を前提としている。アリストテレス主義をどのようにすれば、そのような都市国家の存在しない世界において道徳理論として意味あるものになりうるのだろうか、という疑問が生じるのは当然であろう。アリストテレス主義を適用するには、古代の都市国家のような社会を再建することが必要となる。

#### (ウ) 諸徳の一性に関する疑問

アリストテレスはこのことに関して、プラトンの信念を継承し、それによって抗争を回避されるか処理されるべきこととして感じ取った。わかりやすく言い換えるならば、ソポクレスの悲劇における登場人物たちの対立は、何らかの徳の不十分な所有あるいは行使から生じる実践的知性における欠陥が原因だとする。アリストテレスによれば、誰もが善い人である世界では悲劇など起こりえないのである。しかし、諸個人の悲劇的対立と衝突を構成するものは、彼らが出会ったことで具体化された善と善の衝突なのであり、そうした衝突はどんな個人の諸特徴よりも先立ち、またそれらとは独立のものである。したがって、アリストテレスの諸徳の一性に関する見解は不十分であるといえる。

### 第3章 「よく生きる」とはどういうことか

前章において、諸徳の伝統について確認した。本章では、本論文の最初の問いに戻って議論を進める。最初の問いとは、「よく生きる」とはどういうことか、であった。そこでまず、マッキンタイアの物語的な考え方について説明する。次に、マッキンタイア自身が主張する「よく生きる」ということについて、物語的な考え方から導き出される答えを提示

---

<sup>28</sup> アラスデア・マッキンタイア著(篠崎榮訳)『美德なき時代』199頁

する。そして、最後にマッキンタイアの今後の課題について考察する。

## 第1節 物語的な考え方

本節では、これまでに見てきた諸徳の伝統とアリストテレスの徳論にヒントを得て、マッキンタイアが徳の核心的概念について述べていることをまとめる。まず、英雄社会、古代ギリシアと中世をも含めた諸徳の不両立なリストを列挙し、それらがすべて普遍的な忠誠への要求をしていることを確認する。そして、その忠誠を要求できるような諸徳についての単一の核心的概念の存在とそれを理解可能にするための背景の存在を示す。次に、競合するそれぞれの要求から諸徳についての核となる概念を取り出すために、背景となる 3 段階の説明を行う。

### (1) 不両立なリストから浮かび上がる徳の核心的概念の性格の背景となるものの存在

マッキンタイアは「思考伝統」という観念に基づいて、諸徳についての伝統を考察してきたが、これに対して以下のような応答をされることが予想される。

「あなたが概説してきたかなり首尾一貫した思考伝統であっても、その内部には 1 つの徳についての実に多くの異なる相容れない諸概念があるではないか。だから、その徳の概念や実際その歴史といったものに何らかの現実的な統一性があるとは言えないだろう」<sup>29</sup>

実際たしかに、ホメロス、ソポクレス、アリストテレス、新約聖書<sup>30</sup>、中世の思想家たち<sup>31</sup>は、それら諸徳のリストも、諸徳の重要性に関する順序づけも互いにきわめて異なっている。したがって、諸徳については多くの競合する考えが存在し、マッキンタイアが示している伝統の内部であっても単一の核となる考えはない、という結論に至るのも無理はない。そして、マッキンタイアはこの主張をさらに強化するかのようになり、ホメロスとアリストテレスと新約聖書の、それぞれの諸徳のリストを比較し、その違いを明らかにしている。また、それよりもずっと後世の 2 つのリスト、すなわちジェーン・オースティン<sup>32</sup>とベンジャミン・フランクリン<sup>33</sup>のリストを、それら 3 つのリストと比較し、その差異と不両立を強調しているのである。その上で、それらは「徳とは何か」についての異なった理論を具体化し表現しているのではないかと自問自答する。そして、それぞれの説明の内容を検討し、徳についての 3 つのずいぶん異なる考え方に分類している。第一に、「徳とは、個人に

<sup>29</sup> アラスデア・マッキンタイア著『美德なき時代』222 頁

<sup>30</sup> キリスト教の聖典である聖書のうち、キリスト誕生後の神の啓示を記したもの。

<sup>31</sup> フランスのスコラ哲学者ギヨーム・ド・コンシュヤピエール・アベラール、イギリスの大司教トマス・ベケット、フランスの哲学者アラン・ド・リール、アキナスなどといった思想家。

<sup>32</sup> 英国の女流小説家。

<sup>33</sup> アメリカの政治家、科学者。

その社会の役割を果たす力を与えてくれる性質である」とするもので、ホメロスの叙事詩で示されている性質である。第二に、「徳とは、個人に人間に特有の、テロス—自然的なものであれ超自然的なものであれ—の達成に向かって進む力を与えてくれる性質である」とするもので、アリストテレスや新約聖書、中世の思想家の 1 人であるアキナスが主張する。第三に、「徳とは、地上的かつ天上的な成功を達成するのに功利性をもつ性質である」とするもので、ベンジャミン・フランクリンが考える性質である。

一方で、これらの諸徳についての競合するどの説明も、理論上にとどまらない制度上の覇権を要求している、ということ指摘する。たとえば、ホメロスの叙事詩『オデュッセイア』では農業とアゴラ<sup>34</sup>と法であり、アリストテレスにとってはポリスである。マッキンタイアは、この事実をふまえてある 1 つの主張をする。それは、これらの競合する要求から、普遍的に忠誠を要求できるような諸徳についての単一の核となる概念を取り出し、それについてこれまでのいかなる説明より強い説得力ある説明を与えることができる、ということである。これまでの説明から考えられる徳という概念の 1 つの特質とは、その概念が適用されるためには、社会・道德生活のいくつかの特質についての説明を前提としているということであった。たとえば、ホメロスの説明では社会的役割という概念に、アリストテレスの説明では人間行為のテロスとして考えられている人間にとっての善き生という概念に従属する。そこでまず、マッキンタイアが与えようとしている説明において徳という概念を理解可能なものにする背景となるものが何かを示す必要がある。

## (2) 徳の核心的概念の性格の背景となる 3 段階の説明

マッキンタイアは、徳の核心的概念の性格を明らかにするために、その概念の論理的な発展には 3 つの段階があることを示し、それを順に確認している。それら段階において、それぞれ「実践」、「人生の統一性」、「道德伝統」という概念上の背景が存在する。以下では、それらを背景とした各段階を説明し、徳の核心的概念を性格づける。

### (ア) 実践

マッキンタイアは、諸徳の核心的概念を同定するために、まず諸徳が発揮されるあるタイプの実践に言及するというアリストテレス的な考え方をを用いて説明する。マッキンタイアは、「実践」という言葉を日常的な用法とは異なった意味で用いており、「実践」とは首尾一貫した複雑な形態の、社会的に確立された協力的な人間活動であると定義する。「実践」とおして、その活動形態にふさわしく、またその活動を部分的に規定している卓越性の基準を達成しようと努めることによって、内的な諸善が実現される。このような「実践」を説明するためのキーワードとして、「実践に内的な諸善」という観念と「卓越性の基準」という観念の説明を行う。

---

<sup>34</sup> 古代ギリシアの都市国家の公共広場。市民の集会や談判、裁判、交易などの場となった。



「実践に内的な諸善」に対置されるのは「実践に外的な諸善」である。「外的な諸善」の特徴は、「内的な諸善」より理解しやすい。というのも、それが達成されたときには、それは常にある個人の財産、所有物となり、誰かがそれをより多く持てばそれだけ他の人々の持ち分が少なくなる。たとえば、私は学生オーケストラのコンサートマスター<sup>35</sup>として活動した経験があるが、その名声やオーケストラの中での地位、あるいは影響力といったものが「外的な諸善」である。それに対して「内的な諸善」の特徴とは、卓越しようとする競争の結果、その達成がその実践に参加する共同体の全体にとって善となるということである。私は学生オーケストラのコンサートマスターとしてソロ<sup>36</sup>を担当したが、まさにその達成そのものが「内的な善」である。

「卓越性の基準」は、私自身の仕事振りは不十分なものであると判断するために必要なものであり、私自身の態度、選択、嗜好、趣味などの実践を部分的に定義している。「実践」には歴史があり、歴史上認識されてきた最善の基準がもつ権威を認めることは、「卓越性の基準」の権威に服すことになる。この基準は歴史的に追及され、進歩してきたものであり、未来に向けて進歩していくものである。学生オーケストラのコンサートマスターの例を用いるならば、過去のコンサートマスターの仕事振りによって権威ある「卓越性の基準」が形成されてきた。私のすべきことは、その基準の権威に服し、進歩させるべく卓越性を追求していくということである。

これらの説明から、徳とは獲得された人間の性質であり、その所有と行使によって、私たちは「実践に内的な諸善」を達成することができ、その欠如によって私たちは「実践に内的な諸善」の達成から効果的に妨げられる、ということがわかる。

#### (イ) 人生の統一性

ここで述べるべきことは、1人1人の人間の生を統一体として考えるために必要となる概念の説明である。この説明のキーワードとなる諸概念は、「物語」、「理解可能性」、「人格の同一性」、「申し開き能力」である。これらは「人生の統一性」という観念の内部において相互前提の関係にあるため、それぞれ独立に説明することが難しい。そこで、人間の行為と自己性についての説明を行う中で、それらの概念について言及する。

ある人間の行為を特徴づけるには、その行為から行為者の意図とその意図を理解可能なものにする舞台の両者を切り離すことはできない。行為者の意図は、どれが主要な意図でその行為と因果関係にあるのかを知るという因果的な仕方と、より短期の意図がどのように長期の意図に関係づけられているかを知るという時間的な仕方によって特徴づけられる。また、その意図を理解可能なものにする舞台には語られるべき特殊な歴史があり、その歴

---

<sup>35</sup> オーケストラの首席第1ヴァイオリン奏者。楽員全体の指導的立場にあり、ときには指揮者の代わりも務める。

<sup>36</sup> 通常オーケストラのヴァイオリンパートを含めた弦楽器パートは、各パート数人で演奏するが、作曲者の指定により首席奏者の独奏となることもある。

史の中でその行為が歴史の続きの部分構成する 1 つの挿話となる。したがって、ある種の物語的な歴史が人間の行為を性格づける基本的なジャンルであることがわかる。これに対し、分析哲学<sup>37</sup>に採り入れられたような「基礎行為」という観念は、ある行為を歴史のある舞台から切り離し、原子論的に考えて複雑な行為と相互行為を単純な構成要素を基に分析しようとする。したがって、行為を理解可能なものとして性格づけるためには「理解可能性」という概念が不可欠となる。「理解可能性」という概念は、人間存在とその他の自然的な存在<sup>38</sup>を区別する。つまり人間存在は、自分がしたこと、自分に起こったこと、自分が目撃したことなど、これまでの人生におけるあらゆる時点のことについても「申し開き」できるもので、他者にも「申し開き」を求めうるものだけということである。人間の行為は、その意図と意図を理解可能なもの舞台についての物語を申し開きすることによって説明されるのである。そして、理解可能な物語は、その登場人物の統一性、すなわち行為者の人格の同一性も要求する。ある物語におけるある時点での登場人物が別の時点では別の人物であれば、その登場人物の人格の同一性を認めることはできない。行為者の人格の同一性が前提とされなければ、物語が語られるような主体は存在せず、その物語自体も存在しえないのである。

人間の行為と自己性についての説明が示唆していることは、私たちの人生がある 1 つの物語を形成しているということであり、またその物語もより大きな物語の一部となっているということである。

#### (ウ) 道徳伝統

これまでの「実践」と「人生の統一性」という観念の説明から理解されることは、私たち人間は物語の形式で理解された人生において、実践をとおしてそれに内的な諸善を達成し、「よく生きる」とはどういうことなのかを追求していくということである。ここでは、なぜ「道徳伝統」について認識する必要があるのか、「道徳伝統」とはどういう伝統なのか、を簡単に説明する。

「よく生きる」ということとは、場所、時代、社会、人によって様々であり、私たちはただの個人としてそれを求め、諸徳を実行することができない。<sup>39</sup>つまり、私たちにとって善いこととは、これらの特定の役割を生きている者にとっての善であるはずである。した

---

<sup>37</sup> アメリカやイギリスを中心とする代表的哲学。言語分析をとおして哲学の問題を解決あるいは解消しようとする。

<sup>38</sup> 申し開きのできない存在のこと。たとえば、自分にとって異質な社会構造や異文化、人間以外の生物、いくつかのタイプの神経症や精神病患者など。アラスデア・マッキンタイア著『美德なき時代』256~257 頁

<sup>39</sup> 「前 5 世紀のアテナイの将軍にとって善き生であるものは、中世の修道女や 17 世紀の農民にとってのそれとは同じではないだろう。……私は誰かの息子か娘であり、別の誰かの従兄弟か叔父である。私はこのあるいはあの都市の市民であり、特定のギルド、職業団体の一員である。」アラスデア・マッキンタイア著『美德なき時代』270 頁引用

がって、私たちの人生の物語は、私たちの同一性の源である諸共同体の物語の中に埋め込まれているのである。このことから、好むと好まざるとにかかわらず、認める認めないにかかわらず、私たちはある伝統の担い手の一人であり、その伝統を認識しておく必要がある。

あらゆる思考は、ある伝統的な思考様式の文脈の内部で行われ、その限界を批判と考案をとおして超越していく。つまり、伝統とは歴史的に拡張され社会的に具体化された議論であり、マッキンタイアはそれを「生きた伝統」<sup>40</sup>と呼ぶ。この伝統の内部では、「実践に内的な諸善」についても、1人1人の人生がもつ諸善についても議論される。まさにこの議論こそが「道徳伝統」である。その内部において私たちは、伝統を維持し強化したり、または弱め破壊したりする諸徳の意味と目的を見出すことができる。諸徳の意味と目的は、諸実践に内的な多様な善を達成するために必要な諸関係を維持することにおいて、また個人が自分の人生の全体の善として自分にとっての善を捜しだせるような形態の個人生活を維持することにおいて、さらに諸実践と個人生活の両方に必要な歴史的な文脈を与えている諸伝統を維持することにおいても見出されるのである。

## 第2節 マッキンタイアの「よく生きる」

マッキンタイアは、これまで確認してきた人間の生の統一性が、物語的な探求の統一性であるとする。「探求」という概念は2つの特質をもつ。1つ目は最終的なテロスについての少なくとも部分的に限定された何らかの概念がなければ探求の開始はありえない、という特質である。どんな種類の人生が善そのものの探求となるのかを初めに規定するのは、他の諸徳を秩序づけることを可能にさせてくれるような善そのものという概念を探し求めるときである。またそれは、諸徳の目的と内容についての理解を拡張するような善そのものという概念でもある。2つ目に、「探求」という概念は、あらかじめ十分に特徴づけられた何かを探索するというのではないという特質である。つまり、探求の目標が最終的に理解されるのは探求の過程であるということである。したがって諸徳は、諸実践を維持してそれらに内的な善を達成することを可能にするだけでなく、善そのものを求める重要な探求の中で私たち人間を支える性向であると理解することができる。

そして、ようやく「よく生きる」とはどういうことかについての結論を示すことができる。マッキンタイアにとって「よく生きる」とは、「よく生きる」とはどういうことかをよりいっそう理解させてくれる諸徳を所有し、行使しながら、物語的な人生の中で人間にとっての善き生を絶えず求めて生きることである。

## 第3節 マッキンタイアの今後の課題

---

<sup>40</sup> この語と対比して用いられているのは、イギリスの政治家、著述家であるパークの言う「瀕死の状態か死に体」としての伝統である。

第 2 章で紹介したような諸徳についての伝統的見解にとって重要な背景となっていた「(物語的な)人生の統一性」という観念と「実践」という観念は、啓蒙時代から近代にかけて、いつの間にか道德文化の隅へと追いやられてしまった。すなわち、前者は「物語」という概念が芸術の領域へと押し込められ、人間の生を形作るものとしての結びつきを絶ってしまい、後者は、実践の従事と考えられていたものがたんなる美的消費と見なされるようになってしまったのである。

マッキンタイアの議論を振り返り、今後の課題を示すために、このような時代における道德哲学に見られる 3 つの特質について述べる。第一に個々の諸徳の性格づけに関するものである。人間にとっての善き生によって特定された共同体の善について共有された考えのない社会では、その善の達成に貢献することについての実質的な概念は存在しない。正義の定義のし直しが行われたのもこのような事態からである。第二は徳と規則の関係についての新しい考え方である。アリストテレス的な考え方では、諸徳は規則や法の役割、機能とは区別され対照されるべき役割と機能をもつものであった。しかし、近代においては道德の諸規則への服従を生みだすのに必要な性向であると考えられるようになってきている。第三に、複数形の諸徳という概念から単数形としての徳という概念への移行である。道德語彙を理解するための明確な中心的文脈から切り離され、様々な競い合う道德集団によってそれぞれ特別な相異なる目的のために利用されるようになってしまったのである。

マッキンタイアは、数世紀にもわたる道德哲学や社会科学の努力にもかかわらず、上記のような特質をもつ道德的あるいは自由主義的個人主義の観点についての首尾一貫した合理的な言明がいまだになされないということと、アリストテレス的伝統は道德的かつ社会的な態度やコミットメントに理解可能性と合理性を回復させることができるということを主張してきた。今後は、哲学における中心的な諸問題に解決不可能なものはないという立場から、上記のような特質を持つ近代の論争を解決するための適切な合理的手続きとは何かということを経系的に問うという仕事に従事することが必要となる。さらに、マッキンタイアは以下のようにも述べている。

「すでに到来している新たな暗黒時代を乗り越えて、礼節と知的・道德的生活を内部で支えられる地域的形態の共同体を建設することである。そしてもし諸徳の伝統があのかつての暗黒時代の恐怖を生き抜くことができたのならば、私たちに希望の根拠がまったくないわけではない。……今私たちはゴドー<sup>41</sup>をではなく、もう 1 人の——疑いもなくきわめて異なった——聖ベネディクトゥス<sup>42</sup>を待望している。」<sup>43</sup>

<sup>41</sup> 劇作家サミュエル・ベケットの戯曲『ゴドーを待ちながら』の登場人物。この戯曲では、自己の存在意義を失いつつある現代人の姿とその孤独感を描いている。

<sup>42</sup> イタリアの修道者。ローマ・カトリック教会において修道院制を創始した。

<sup>43</sup> アラスデア・マッキンタイア著『美德なき時代』320~321 頁

おわりに

マッキンタイアは、人生についての物語的な考え方に特徴的な性格を2つ挙げている。1つ目は目的論的性格であり、私たちの人生は未来に向けて投影されるある種の形をもつということである。何らかの未来のイメージによって形成されていない現実には存在しないのである。そして、2つ目は予測不可能な性格である。虚構の物語の中の登場人物と同じく、私たちは何が次に起こるのかを知らないということである。これらの性格をもった物語的な考え方は、私たちがこれまでに生きてきた人生を振り返ることによって、よりいっそうたしかなものに感じられる。私たちには、過去があり、現在があり、未来があるのだ。これを否定するのであれば、「私」とは誰なのか答えることはできない。そして、「私」という存在にとって「よく生きる」とはどういうことなのかを考えることは無意味である。

本論文において、「よく生きる」ということはどういうことか、具体的かつ詳細に示すことができたとは思えない。むしろ、その疑問がより深まったようにさえ感じる。「よく生きる」とはどういうことなのかという疑問は、私自身の人生を生き抜くことでしか答えられないものなのか、あるいは別の方法が存在するのか。新たに生じたこれらの疑問を今後の課題としたい。

#### 参考文献

- アラスデア・マッキンタイア著(篠崎榮訳)『美德なき時代』(2012年、みすず書房)  
アラスデア・マッキンタイア著(深谷昭三訳)『西洋倫理学史』(1986年、以文社)  
アリストテレス著(朴一功訳)『ニコマコス倫理学』(2011年、京都大学学術出版会)  
岩田靖夫著『アリストテレスの倫理思想』(1985年、岩波書店)  
小坂国継、岡部英男編『倫理学概説』(2008年、ミネルヴァ書房)  
深田三徳、濱真一郎編著『よくわかる法哲学・法思想』(2011年、ミネルヴァ書房)  
マイケル・サンデル著(鬼澤忍訳)『これからの正義の話をしよう いまを生き延びるための哲学』(2011年、早川書房)  
森末伸行著『法思想史概説』(2002年、中央大学出版部)  
G.E.R.ロイド著(川田殖訳)『アリストテレス』(1973年、みすず書房)